

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11252

研究課題名（和文）認知症高齢者の日常生活支援におけるアドボカシー実践向上プログラムの実施と評価

研究課題名（英文）Verification of the effective usage of developed the Advocacy Practice Guiding Principles in daily life care for elderly individuals with dementia in elderly care facilities

研究代表者

山地 佳代（Yamaji, Kayo）

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：80285345

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：認知症高齢者の日常生活支援におけるアドボカシー実践指標を、高齢者施設のケア専門職が活用することによりアドボカシー実践が向上するか検証した。検証に先立ち、全国の高齢者施設のケア専門職への質問紙調査を実施し、965部の有効回答を分析した結果、信頼性および妥当性が確認された4因子24項目で構成される「高齢者施設における認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度」を開発した。特養のケア専門職を、アドボカシー実践指標の説明を受ける群と、研修を受ける群に割り付け、効果を検証した。両群とも介入後にアドボカシー実践頻度が有意に向上したが交互作用はみられなかった。アドボカシー実践指標の有効性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アドボカシー実践指標は、認知症高齢者への日常生活支援をアドボカシーの概念に基づき捉えなおした新しい指標である。本研究では、アドボカシー実践指標の活用効果検証により、介入後にアドボカシー実践頻度が有意に向上することが明らかになったことから、ケア専門職が認知症の特徴をふまえて日常生活支援においてアドボカシー実践を具体的に意思決定できることが示された。また、高齢者施設における認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度を開発したことにより、アドボカシー実践頻度を測定することが可能となった。本研究成果は、認知症高齢者のケアの質の向上に寄与することが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Develop and test the reliability and validity of a measurement instrument to measure advocacy practices in daily life care for elderly individuals with dementia. The developed scale has high model fit and reliability coefficients, and its construct validity and reliability were confirmed. The scale was judged to be appropriate as a measure of advocacy practice. Verification of the effective usage of developed the Advocacy Practice Guiding Principles in daily life care for elderly individuals with dementia in elderly care facilities. Nonrandomized controlled trial. The frequency of advocacy practice was measured before and after the intervention using the "Daily Life Care Scale for Protecting the Rights of Elderly Individuals with Dementia," to evaluate the effect modification. It became clear that simply having the Advocacy Practice Guiding Principles explained and utilized would improve the frequency of advocacy practice.

研究分野：認知症ケア

キーワード：認知症 アドボカシー 高齢者施設 日常生活支援 尺度開発 非ランダム化比較試験

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本の 65 歳以上の認知症を有する高齢者（以後、認知症高齢者）数は年々増加傾向にある。地域包括ケアシステムの推進により脱施設化は進められてきたが、症状の重度化や少子化・人口減少に伴う介護力不足などによって、認知症高齢者が施設で生活するケースは今後も無くなることはないと考えられた。そのため、高齢者施設において認知症高齢者が人生の最期まで尊厳を保持しその人らしい暮らしを続けるための支援の構築は喫緊の課題であるといえた。本研究に着手した 2019 年は、認知症施策をさらに推進するための認知症施策推進大綱が取りまとめられ、権利擁護対策も認知症支援体制の一つとして取り込まれ、成年後見制度や日常生活自立支援事業などが制度として実施されていた。しかし、高齢者施設で暮らす認知症高齢者が尊厳をもって最期まで生活するためには、食事や排せつといった日常生活のひとつひとつにおいて、尊厳を護るケアが提供されることが必要であり、そのためには認知症高齢者に直接支援を提供する介護職や看護職などの専門職のケアの質を高めることが第一義的に重要であると考えた。

高齢者の尊厳を護るための日常生活支援を実践する上で重要な概念として、アドボカシーに着目した。アドボカシーは Fry.S.T ら（2014）によると、認知症高齢者の尊厳を護るための意思決定の支援、ニーズを表明することやニーズの代弁、権利侵害を防ぐことを含むものである。そこで研究代表者が 2014 年、認知症看護認定看護師を対象に行った調査では、高齢者施設において認知症高齢者は【意思決定が難しい】【尊厳が尊重されにくい】などのアドボカシーを必要とする状況があり、日常生活支援において実践されるアドボカシーには【意思決定を支援する】【利益を保護する】【尊厳を守る】【集団生活の調整をする】ことがあり、その具体的な実践内容が質的帰納的に明らかになった（山地，2017）。これらの結果をもとに、専門家会議及び文献検討をふまえ、平成 28 年度～平成 30 年度基盤研究（C）では、認知症高齢者の日常生活支援におけるアドボカシー実践指標を作成した（山地，2021）。

認知症ケアでは認知症の人とケアスタッフとの関係がケアの質の影響する（箕岡,2014）という点からも、作成したアドボカシー実践指標をただ提示するだけではケアの改善につながらないと考えられた。そこで、認知症高齢者の権利や意思決定を守る日常生活支援の実践につながる、アドボカシー実践指標の有効な活用方法を検討する必要があった。

### 2. 研究の目的

認知症高齢者は尊厳が脅かされやすい。本研究は、高齢者施設で暮らす認知症高齢者が尊厳を保ち権利を守られた日常生活を送るため、看護職や介護職などのケア専門職が、認知症高齢者に対しアドボカシーの概念をとり入れた日常生活支援を向上させることができるよう、アドボカシー実践指標を効果的に活用する方法を検証することを目的とした。

目的を達成するために、研究を 2 段階で進めた。

#### 1) 高齢者施設で暮らす認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度の開発

認知症高齢者の日常生活支援におけるアドボカシー実践を測定するための測定用具を開発し、信頼性と妥当性を検証する。

#### 2) アドボカシー実践指標活用効果の非ランダム化比較試験による検証

高齢者施設のケア専門職にアドボカシー実践指標を活用して頂き、その効果を評価するとともに、アドボカシー実践頻度向上につながる、より効果的な活用方法を検証する。

### 3. 研究の方法

#### 1) 高齢者施設で暮らす認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度の開発

##### (1) 尺度原案の作成と質問紙調査票の作成

先行研究により作成したアドボカシー実践指標の小目標 40 項目をアイテムプールとし、それぞれの実践頻度を問う尺度原案を作成した。プレテストの後、36 項目からなる「認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度（案）」を作成した。

##### (2) 調査方法

全国の特別養護老人ホームおよび介護老人保健施設に勤務する、看護職および介護職を対象とした。独立行政法人福祉医療機構（2019）が運営する Welfare and Medical Service Network System（WAMNET）に登録されている全国の特養および老健から、多段無作為抽出法により選出された 1,000 施設の責任者に、研究協力依頼文を送付した。承諾が得られた施設に、人数分の調査協力依頼文と質問紙調査票を送付し、施設責任者または窓口担当職員から各個人に配布をしてもらった。質問紙調査票は回答者各個人から郵便にて返送してもらい、回収した。調査期間は 2020 年 1 月～5 月までであった。

##### (3) 分析方法

統計解析ソフト SPSS ver.25、AMOS ver.25 を使用し、項目分析、構成概念妥当性の検討、信頼性の検討、基準関連妥当性の検討を行った。

##### (4) 倫理的配慮

本研究は調査時の研究者の勤務大学であった大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認を得た（申請番号 2019-57）。

2) アドボカシー実践指標活用効果の非ランダム化比較試験による検証

新型コロナウイルス感染症拡大のため、研究協力施設と何度も調整をした後、以下の方法にて実施した。

(1) 研究デザイン

準実験研究(非ランダム化比較試験)とした。高齢者施設のケア専門職に対して、アドボカシー実践指標の具体的な説明を受講する説明群と、アドボカシー実践指標の具体的な説明を受講した後にアドボカシー実践の振り返りと具体的実践法を話し合う研修群の2群に割り付け、介入前後に認知症高齢者の権利を守る日常生活支援の実践頻度を測定し、時間の交互作用を確認して評価する。

(2) 研究対象

研究協力施設は、研究協力が得られた特養1施設とした。研究参加者は入居部門、通所部門、在宅部門の看護職と介護職とするが、2群において職種のばらつきが均等になること、職場での経験年数なるべく均等になること、またコンタミネーションを最小限にするため、入居部門においてはユニット毎の参加を依頼し、説明群・研修群それぞれ33名の対象者をリクルートした。

(3) 介入方法

アドボカシー実践説明会

研究参加者がアドボカシーとは何かを正しく理解し、その目的と実践方法を具体的に知るところを目的としたアドボカシー実践指標説明会(以下、説明会)を開催した。アドボカシー実践指標を小冊子にしたものとアドボカシー実践指標実践事例集を配布し、アドボカシーについて説明するビデオ約20分を視聴してもらった。今後は冊子や事例集を活用しながら自分の認知症高齢者への日常生活支援を振り返り、次の実践に活かして頂くよう依頼した。

アドボカシー実践研修会

アドボカシー実践指標研修会(以後、研修会)は、アドボカシー実践指標に基づいて実践を振り返り、できていたことを確認し、困難なことを目標に近づけるための改善策を見出すことを目的とし、説明会に参加後、16~24週間後に施設内の1室に5,6名ずつ集まって頂き、60分間のグループワークを実施した。

リマインドレター

説明会から研修会までの期間は、説明会実施時点では約8週間後を想定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として急遽16~24週間後へと変更になった。期間があいてしまう事になったが説明会の知識が低下することが無いよう、定期的リマインドレターとしてアドボカシー実践指標の内容を目標ごとに小ポスターにして送付し、研修群も説明群もどちらの参加者にも目につく場所に掲示して頂いた。

(4) 倫理的配慮

京都橋大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号20-49)。

4. 研究成果

1) 認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度の開発

(1) 調査結果

調査票の配布と回収

本調査に協力して頂いた施設は特養96施設、老健39施設、計135施設であり、発送した調査票は1,647部であった。そのうち1,071件の返送があり、回答不備等を除く965件を有効回答とした(有効回答率58.6%)。

対象者の背景

対象者の勤務施設、職種、職位、年代は図1の通りであった。その他の施設にはグループホームやショートステイ等が含まれていたが、調査票配布を依頼した経緯から、特養または老健勤務経験者と判断し、対象に含めた。高齢者ケアの経験年数は平均12.3年±7.04年、認知症ケアの経験年数は平均10.9年±6.81年であった。

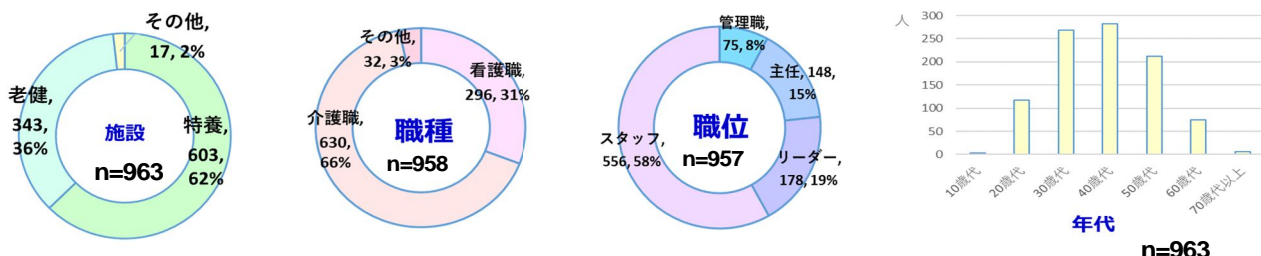


図1 対象施設、対象者の年代、職種、職位

項目分析

36項目について、平均±標準偏差が1~6を超える天井効果および床効果はなかった。項目間相関が0.7以上の項目、I-T相関が0.3未満の項目もなく、削除項目は無かった。

## 構成概念妥当性の検討

### ・探索的因子分析

最尤法とプロマックス回転により、因子数を固定せず探索的因子分析を行い、24項目から構成される4因子に収束された(累積寄与率 51.513%)。各因子に集まった項目を検証し、「意思ある人としてその人を理解する」「本人が決めることを支え、実現する」「安全でプライバシーの守られた居場所を作る」「本人の最善の利益かどうか確認する」と命名した。

### ・確認的因子分析

確認的因子分析を行った。CMIN=968.64 自由度=246 0.1%水準で有意であった。モデルの適合度はGFI =0.912、AGFI =0.892、CFI=0.933、RMSEA=0.057であった。潜在変数 - 観測変数間には全質問項目において0.57以上の妥当なパス係数が得られた。

### 信頼性の検討

尺度全体のCronbach's 係数は0.942、各因子のCronbach's 係数は0.902~0.755であった。

### 基準関連妥当性の検討

併存的妥当性評価のために、道徳的感受性尺度との相関係数を算出したところ、Pearsonの相関係数は0.760(p<0.01)で高い相関が確認された。道徳的感受性尺度のクロンバック係数は0.912であった。

## (2) 尺度の信頼性と妥当性について

開発された尺度はモデルの適合度や信頼性係数も高く、構成概念妥当性及び信頼性が確認された。アドボカシーガイドラインとの比較においても元々の構成内容をほぼ踏襲する形で構成され、アドボカシー実践を測定する尺度として適切であると判断できた。

## 2) アドボカシー実践指標活用効果の非ランダム化比較試験による検証

### (1) 研究結果

#### 研究のフローチャート

研究のフローチャートを図2に示す。説明会は2021年3月に、群毎に4~10名ずつ、9回に分けて実施した。研修会は、当初計画では、説明会から8週間の後に開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大により、研修会開催日程を延長し、2021年7~8月に実施した。研修会は最終的に施設の1室で5~6名ずつ集まって頂き、5回に分けて開催した。対象者のうち研修群の1名が退職のため途中で参加を辞退され、32名となった。

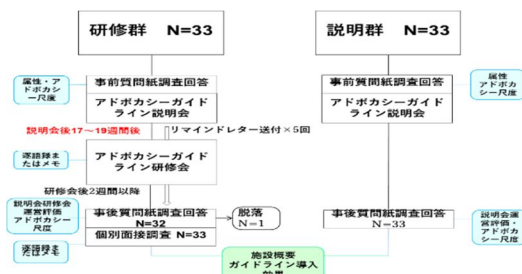


図2 研究のフローチャート

### 研究参加者の概要とベースライン特性

研究参加者の属性について、説明群と研修群では、年代や職種、倫理やアドボカシーに関する研修受講経験、職種経験年数など、どの属性においても有意な差はみられなかった。介入前の「認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度得点」(以後、アドボカシー尺度得点)の合計点は、説明群よりも研修群のほうが高かったが、有意差はみられなかった。

#### アドボカシー尺度得点の変化

アドボカシー尺度得点の変化について、まず平均得点を算出し、全体及び因子毎の介入前後を比較した。全項目と、第1因子、第2因子の説明群、第4因子では介入前より介入後に有意に平均得点が上がっていた。研修群の第2因子と第3因子では、介入前より介入後に平均得点が上がっていたが、有意差はなかった(表1)。

アドボカシー尺度の合計得点について前後の差をカテゴリーに分けた(図3)。説明群はアドボカシー得点が1-20点増加したものを算出すると21名(72.4%)となり、約3/4がこのカテゴリーに入った。一方、研修群は得点が減少したものが7名(23.3%)おり、点数変化にばらつきがみられた。

説明群と研修群のアドボカシー尺度合計得点について、二元配置分散分析の結果、事前と事後でアドボカシー尺度得点の時間の主効果は有意であった(F=30.755, p<0.01)。しかし時間と群の交互作用はみられず(F(1,57)=.002, n.s.)、時間と群の組み合わせの効果はなかった(図4)。

#### 研修会グループワーク内容

研修会グループワークでは、「自分たちがバタバタしているときにどう対応するか」や「ソーシャルディスタンスへの対応」などのテーマや、個別の事例に対して困っている対応、モヤモヤしていることなどが挙がった。



表1 アドボカシー尺度得点の変化 因子毎のアドボカシー尺度平均得点の前後比較

		事前 説明群N=33 研修群N=33		事後 説明群N=33 研修群N=32		t値	p
		平均	SD	平均	SD		
アドボカシー平均得点 (全項目)	説明群	4.2	0.37	4.5	0.48	5.02	0.00
	研修群	4.4	0.47	4.6	0.58	3.35	0.00
第1因子 意思ある人としてその人を理解する	説明群	4.4	0.39	4.6	0.49	3.83	0.00
	研修群	4.5	0.54	4.8	0.55	3.62	0.00
第2因子 本人が決めることを支え、実現する	説明群	3.8	0.46	4.2	0.54	4.06	0.00
	研修群	4.2	0.55	4.4	0.65	1.91	0.65
第3因子 安全でプライバシーの守られた居場所を作る	説明群	4.4	0.53	4.6	0.60	2.12	0.42
	研修群	4.5	0.72	4.8	0.65	2.00	0.54
第4因子 本人の最善の利益かどうか確認する	説明群	3.8	0.64	4.4	0.80	4.40	0.00
	研修群	4.0	0.62	4.4	0.76	3.10	0.00

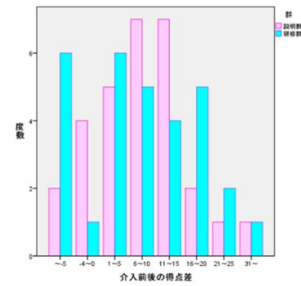


図3 アドボカシー尺度得点の変化 アドボカシー尺度合計得点の前後の得点差

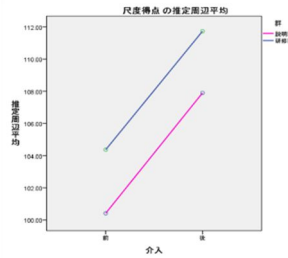


図4 事前/事後におけるアドボカシー尺度合計得点

### 個別面接調査結果

研修会参加者への個別面接調査では、アドボカシー実践にとりくみ、自分の実践がアドボカシーを意識したものに变化したという発言がある一方、アドボカシーを実践する上で難しさを語る人もいた。グループワークの意見を参考に実践してうまくいった人と、うまくいかなかった人がいることがわかった。

### (2)アドボカシー実践指標の活用効果

アドボカシー実践指標の活用効果については、説明群も研修群も測定前後にアドボカシー得点が有意に上昇した。説明会に参加しアドボカシー実践指標を活用することによって実践頻度が向上することが示された。これは Gallagher (2016) の述べる倫理教育の目的に沿うと、アドボカシーの目標を知る知識面、アドボカシーの枠組みで日常生活支援をみる知覚面、アドボカシーの視点で実践をふりかえる内省面、アドボカシーを実践する行動面、の4つの倫理的能力を包括的に促進させるものとして有効であると考えられた。

2元配置分散分析の結果、時間と群の交互作用はみられなかった。組織の中で知が循環するための SECI モデル (野中, 2013) に照らしてみると、アドボカシー実践知の共同化や表出化、連結化はおこったものの、内面化に至らなかったと考えられた。アドボカシーの実践知を内面化し、日常生活支援の場でアドボカシーの概念を柔軟に具現化することができるためには、自由に話し合える場と時間が1回ではなく複数回持つことや、専門家からの助言を入れるなど、開催方法のさらなる工夫が課題となった。

## 5. 結論

認知症高齢者のケアにおいてアドボカシーは重要であるといわれるが、具体的な方法は明確ではなかった。研究者らが開発したアドボカシー実践指標は、日常生活支援にアドボカシーの概念を組み込み、Right-Based-Approach として日常生活支援をとらえなおした新しい指標であった。認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度を開発したことにより、アドボカシー実践を明確に評価することが可能となり、本指標を活用した結果、ケア専門職に認知症高齢者の日常生活支援において何をすることがアドボカシーになるのかを明確に示すことができ、アドボカシー実践頻度が向上し、ケア専門職の実践変容につながる効果が検証された。今後は研修会開催方法のさらなる工夫が課題である。

### <引用文献>

- ・ Fry Sara T., Johnstone Megan-Jane .(2008 / 2014). 片田範子, 山本あい子 (訳). 看護実践の倫理 (第3版), 日本看護協会出版会, 2014, 49-63.
- ・ Gallagher Ann .(2016). 第16章 看護倫理の教育: 倫理的能力の促進 .Davis Anne J. etal (編). 看護倫理を教える・学ぶ 倫理教育の視点と方法, 日本看護協会出版会, 188-206 .
- ・ 野中郁次郎 .(2013). イノベーションの本質, 日経 BP 社 .
- ・ 箕岡真子 .(2014). 認知症ケアの倫理, ワールドプランニング .
- ・ 山地佳代, 長畑多代 .(2017). 高齢者施設での日常生活において認知症高齢者がアドボカシーを必要とする状況と看護師の支援内容, 老年看護学, 22(1), 71-80.
- ・ 山地佳代, 征矢野あや子 .(2021). 高齢者施設で暮らす認知症高齢者の日常生活支援におけるアドボカシー実践指標の開発, 看護福祉学会, 26(2), 177-186 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山地佳代	4. 巻 28
2. 論文標題 施設における認知症ケア 高齢者施設での日常生活支援における認知症高齢者のアドボカシー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床老年看護	6. 最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山地佳代、征矢野あや子	4. 巻 26(2)
2. 論文標題 高齢者施設で暮らす認知症高齢者の日常生活支援におけるアドボカシーガイドラインの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護福祉学会	6. 最初と最後の頁 177-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山地佳代、征矢野あや子、深山つかさ
2. 発表標題 高齢者施設における認知症高齢者の権利を守る日常生活支援尺度の開発
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山地佳代、征矢野あや子
2. 発表標題 認知症高齢者の日常生活支援におけるアドボカシー指標の効果検証
3. 学会等名 日本老年看護学会 第28回学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	長畑 多代  (Nagahata Tayo)  (60285327)	大阪公立大学・大学院看護学研究科 ・教授   (24405)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------